

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW

秋田県信用保証協会
会長 堀井 啓一氏

1952年秋田市（旧雄和町）の雄物川に沿った集落で生まれ、現在も居住。
北海道大学卒業後、1977年秋田県庁へ入庁。鹿角土木事務所を振り出しに、秘書課長、福祉政策課長、財政課長、総務企画部長を歴任し2009年5月副知事就任。2021年4月副知事退任、同年7月秋田県信用保証協会会長就任。



「寝ていて人を起こすことなかれ」(石川理紀之助)

工藤 現在、秋田県信用保証協会の会長を務められていますが、以前は秋田県副知事も務められていたということですか。堀井さんのご経歴についてあらためてお聞かせください。

堀井 出身は秋田市の旧雄和町で、大学在学中と県職員時代の数年間以外はずっと雄和で暮らしています。子供のころは比較的眞面目で人見知りをする少年でした。当時の趣味は地図帳や鉄道の時刻表を読むことでした。小学生の自由研究では全国の鉄道路線をまとめたり、高校時代は鉄道で九州までの10日間の旅をしたり、ママチャリで雄和から男鹿半島一周のサイクリングをしたりしました。旅が好きなのかもしれませんね。

工藤 ママチャリで雄和から男鹿半島。なかなかハードですね。何かそういうスポーツなどをされていらっしゃいましたか？

堀井 いいえ。学生時代はあまり運動が得意ではなく、ほとんど運動はしていませんでした。ただ、健康維持のために30代から山登りと水泳を始めました。

工藤 健康管理大切ですね。社会人になってからの経歴としては、県職員を経て副知事に、そして秋田県信用保証協会へといった感じでしょうか？

堀井 そうですね。大学卒業後に県庁に入庁し、総務企画部長だった2009年に副知事になりましたが、副知事になるなんて想像もしていませんでした。その後、協会に来て今年で3年目になります。

工藤 秋田県信用保証協会さんは起業家や経営者のサポートなど秋田の起業家を増やすという目標実現に向けて大変頼りになる存在ですが、具体的な業務内容を知らない方もいるとは思うので、今一度協会の歴史や業務について教えて下さい。

堀井 協会は1951年に戦後の秋田経済復興のために作られました。主な事業内容としては秋田の中小企業が事業資金を調達する際に、個人に代わり保証を担うこと、保証人という役割を当協会が引き受けるイメージです。以降70年以上続いており、バブル崩壊、金融不況、リーマンショック、東日本大震災、コロナ禍と秋田の中小企業経営を金融の側面からサポートしてまいりました。

工藤 秋田県信用保証協会の歴史で最も地域経済の環境が苦しかったのはいつでしょう？

堀井 私は今回のコロナ禍だと思っています。とても長引きましたし、外出自粛等で消費の落ち込みも大きかったので、特に飲食、観光、レジャーなどのサービス業をはじめ、私たちの生活に身近な事業ほどダメージを受けやすかったので多くの方が苦しい思いをしました。また昨今の物価上昇、エネルギー価格の高騰などもあり、苦しい経営状態に拍車をかけています。そんな中コロナそのものはやっと出口も見えてきたように感じていますが、先日の大雨災害による浸水被害などもあり、長期化したコロナに追い打ちをかけたことで更に経営者の心の疲弊が見られ

ます。

工藤 確かに。コロナが3年という長期に渡ったことが経済をより深刻化させたといえますね。また秋田は「自然災害が少ない」という神話もありましたから、県民にとってよりダメージが大きいかもしれません。ところで堀井さんが仕事の上で大切にしていることはありますか？

堀井 働き始めた頃から座右の銘として「寝ていて人を起こすことなかれ」を掲げています。「まずはこちらから出向き経営者さんと一緒に悩む」という姿勢を常日頃から協会職員にもお願いしています。辛さを共にするという気概を持って、遠慮せずに協会からドンドン踏み込んでサポートすることを大事にしてほしいと思っています。

工藤 秋田が誇る農業の父、石川理紀之助翁の言葉ですね。現場を共有することはとても大切だと感じます。現場に出向いて辛さを共有してはじめてわかることはたくさんあります。公的機関や金融機関には距離感や価値観の違いを感じる経営者も多いと思うので、現場主義のサポートは大変嬉しいことですね。

さて協会の立場で感じている最近の秋田経済の課題などがあれば教えてください。

堀井 いわゆる後継者不足でしょうか。私たちも経営支援やアドバイスをはじめ、具体的な後継ぎのマッチングや、イベントやセミナーの開催など様々な対応をしていますが、中々

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

思うように進まない部分もあります。秋田は経営者の平均年齢が全国一高い県です。このあたりをどう進めていくかは間違いなく大きな地域課題のひとつだと思っています。関連ですが起業家が少ないというのもその要因でもあり課題のひとつでもあります。

工藤 起業家のお話もあったのでそのままの流れでお聞きます。堀井さんからみる最近の秋田の起業環境やスタートアップの現状をお聞かせください。

堀井 まずは県内の大学生や卒業生の起業が増えていることは明るい材料だと思っています。後は、秋田市内に関わらず、観光や飲食の起業が増えているのもよい傾向だと思っています。サービス業が充実することは、地域住民が生活を楽しめる、生活に豊かさが増えることに直結しますので、この種の新しいサービスや事業はもっともっと増えてほしいと思います。心の豊かさは観光、話題づくり、人材育成、教育、文化など様々なものを育みます。秋田で秋田の人が楽しめる、他県から遊びに来てもらえるような場所やお店がどんどん増えれば、秋田を好きになってくれる人が増加し、人口流出も防げると思います。

工藤 心の豊かさ大切ですね。大学生や若者もそうですが、最近の起業相談者の傾向として、40代以上の女性も増えてきている

のが個人的には目につきます。

堀井 そうですね。女性の起業も目立ちますね。また男女問わず50代や60代の起業なども徐々に増加しているように感じます。60代でもリスクの少ないスタートアップの仕組みができれば、起業の流れはより加速するかもしれません。

工藤 その仕組みや支援の制度などが充実すると、人生100年時代の選択肢がより豊かになりそうでうですね。秋田で注目の分野などはありますか？

堀井 確実に農業はそのひとつだと思っています。ポテンシャルはあるのですが、リスクも多く、専業だと大変という現状があります。勉強会や農家の交流会を通してネットワークを作ることができれば、可能性が広がります。それから冬場などの比較的仕事に余裕がある時期には、行政が毎年1ヵ月程度の研修セミナーを開催し先端技術を学ぶとともに農業者同士の交流を深める機会をつくり、参加者に研修費や奨励金が支給されるよう

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財増した。

インタビュー

合同会社ジェグルス(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ 工藤 実

ライター 秋田大学 小林 忠大

企画 共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)



既決